

広島が死による

松島 圭次郎



昭和四年一月三日生
被爆時の年齢：十六才
被爆地：広島工業専門学校校舎内
(千田町)
最終勤務校：市立楠那中学校



(一) 被 爆 前

昭和二十年春に広島県立第二中学校を卒業して広島工業専門学校の機械科に入学したが実際には八月一日からやっと授業を受ける事になったのであり、それまでは中学校の時の動員状態を続けるようにという指示があり陸軍被服廠で働いていた。七月末に我々新入生は西蟹屋町の日本製鋼所の寮に入れられて、八月一日からは千田町の学校まで電車通っていた。父はこの年の春に病死し、母はその頃には現、東広島市志和町の父の郷里に疎開、兄二人は共に海軍に行っていたので、私一人が広島にいた訳である。

当日も授業は八時に開始で、一年生機械科西組教室（校門から近い頑丈な二階建て木造校舎の二階西側教室）、私はチビだから最前列の南の窓際に席を占めていた。一時間目は数学、高橋教授の微積分の講義中であった。

(二) 被 爆

全ての被爆者の証言どおり、暑い夏の日を予告するような晴天であった。警報がどうなっていたのか、多分警戒警報下だったという事だが別に気にもとめなかった。既にそれくらい日本の空は米空軍の思うがままの状況であったのでB-29などはしょっちゅう飛来していたし、又、広島はやられていないので安全だくらいに高を括っていた。

爆音をかすかに聞いたように思ったのでノートから目を上げて窓から空を見上げた。真っ青の高い、高い空にB-29が二機見えた。白銀色に輝いて、アイスクャンディーのようにキラキラときれいだった。南西向きの窓から東の方向に、つまり呉市、海田町方向に飛んでいたから、今思えば多分爆弾投下を終わって避退に入っていたのだろう。ただし、この私の方向感覚はどんなものだろうか、公式記録ではどっちから来てどっちに飛んで逃げたか確かめてはいない。とにかくそんな事は一切分からないから、専ら「きれいだのー、アイスクャンディーが食いたいのう。」くらいを一瞬ボンヤリ考えていた。

その次の瞬間、強烈な閃光が目を射ると同時に「ポッ！」と焼けるような、凄い圧力で

撥ね飛ばされるような、熱波と風圧を顔面と体中に感じ、開いた窓が額縁になって、オレンジ色とも真っ赤とも言おうか、夕焼けのような一色の世界に変わってしとった。 塙塙がどんなものか知らぬが、一瞬その塙塙かオーブンにでも放り込まれたような感じであった。 窓際から見えていた中庭のヒョロとした松の木が絵のように浮かび上がって見えるだけで、他の物は何も見えなかった。

「爆弾じゃ！」という事だけは直感できた。 反射的に両親指で両耳を、他の指で目を覆って机の下に飛び込んだのは誰も同じだったろう。その頃は爆撃に備える訓練で日頃からやらされていた事でもあった。 後に分かったのだが、机の下に飛び込んだ時にはもう事は終わっていたのであって、黒こげになった人、私のように切創や打撲で済んだ者等、あらゆる身体的被害は、あの「ポッ！」と熱波を感じた瞬間にこの五体に加えられていたのだろう。

私は勿論何が何やら分からなかったが、机の下に飛び込んだ時、「ドカーン！」という大音響を聞いた。 爆弾の炸裂音か、何千、何万もの建物の崩壊音なのか、、恐らくそれら全てであったと思うが、私には今もって分からない。 正直、説明があれば今でも聞きたいものである。 「ピカッ！」と光ってから「ドカーン！」と来たのだから、あの「ピカ、ドン」という表現は本当によく表した言葉だと思う。

大音響に次いで真っ暗になった。 怖い、誰もいない。 周りには沢山の学生がいたはずだが、耳もツーンとしていたからか、何も聞こえない暗黒の世界であった。 無我夢中で、本気に「死ぬんじゃ！」と思って念仏しながら這いずり回ったのだった。 それがどれくらいの時間であったか、分からない。

少しばかり埃が薄くなって明かりが射してきて、崩れ落ちた天井材、机、散らばっている本やノートが見えてきた。 頭に手をやる。 血で真っ赤だ。 シャツやズボンもあちこちズタズタで血が吹き出しているところもある。 頭から足まで血だらけである。 ともかく逃げないといけない。 有難い事に大切な弁当が見つかった。 何処をどう這い潜ったか、階段が私の机から近かったので何とか外に出ることが出来た。 頑丈な建物で幸いにも階段は助かっていたのである。

(三) 友人Y君のこと

さて、外に出てみて驚いた。 よく言われているように、皆さんが自分の真横に直撃弾が落ちたのであって、私も例外でない。 ところが、まず見える範囲の総ての建物が倒壊又はそれに近い状態になっており、おまけに其処らじゅうの芝生と言わず通路と言わずひどい怪我をした学生が沢山横たわっている。



授業を受けていた全学生がまともな者は一人もいないのだから無理もないが、どういう訳か見当もつかないので、しばらくは途方にくれた。 シャツはビリビリに裂けて血達磨だし、ズボンもひどい。 ゲートルも血で汚れているしひどい有様だが、頭の出血は自分の手拭いで鉢巻しておいたら止まっている。 幸いにも歩ける程度なのだから軽傷だったと思って感謝しなければならない。

ボンヤリしていたら「松島、助けてくれえや！」と言って肩に寄りかかった学生がいた。 二中同窓生のY君だったと記憶する。 彼には何十年も後に同窓会で会ったが、あの時の話はしなかったから判然としない点もあるが、、、致し方ない。 ともかく、彼の状態は私よりも大分ひどかったのは勿論だが、記憶では右目の上の前額部に大きな裂傷があって深い切創から出血していたように記憶する。 何の知恵もないので、「日赤へ行こうや。」と言って、彼に肩を貸し、校門を出て電車通りへと向かった。 学校の位置から電車通りを北に二〇〇メートルくらいで病院があるのは今も変わらない。

ところが、校門を出てから我々は又びっくりしたのだった。 自分の学校だけだろうと思っていたら、其処らの民家がすべて倒壊していて、街路は瓦、壊れた板や材木、家財、雑物が散乱して歩くのも困難な有様である。 方々で煙もすでに上がっているし、北の中心部方向も煙が上がっていて見えない。 電鉄会社の建物もやられていたし、つまり其処らあたり全てが爆撃後の惨状であった。 線路上には架線が垂れ下がり、煙が流れていた。 今から思うと、被爆直後二〇～三〇分位だろうから、爆心から二キロの千田町あたりでも方々で火の手が上がり始めていたのだろうかと思う。

そんな事よりも、市の中心部の方角はさっぱり煙で状況が分からなかったのであるが、当日疎開作業で動員されていて被爆した中学生達がぞろぞろ歩いてきていた。 それが全員とっていい、ひどい火傷をおっていたのである。 もう昔の事で、細々した点までは記憶も薄いし、その時には勿論大人も子供も、男も女もみな酷い状態だったのであるが、私自身がやはり若い頃であったので同年代の生徒達の事がどうしてもより鮮明に目に付いたのだった。 夏だから皆軽装であったので上着は勿論、ズボンやモンペまでがズタズタに裂けたり焼けたりしてアラメのように体にへばりついている位の状態だし、何よりも体が真っ黒に煤けて、明らかに火傷のせいだろうか、ブタのように膨れ上がっており、腕と言わず足と言わず被布などがめくれて垂れ下がっている。 それはそれは痛かったのだろう、資料館にある人形のように両手を前に突き出して、そろりそろりと、鷹の橋方面から南へ、南へ、宇品方向へ歩いて行く。

資料館の人形はよく出来ているが、実際はもっと煤けて膨れ上がっていて、もっと酷い様子だったように思う。 表情等も分からなかった。 幽霊の行列と、谷本牧師は表現されたが、まさにその通りであったし、その日は何処に行っても終日その光景を目にしなければならなかった。 電車の車掌をしていた女の子だったのだろう、お腹の前に切符カバンが下がっているだけで、衣服は残っていたか無かったか、本当に可哀そうな犠牲者だったが、、、彼女もきっと間もなく苦しみ抜いて亡くなられたであろうと想像する。

(四) 日赤病院にて

友人を連れて病院にそろそろ歩いて行っただが、めちゃめちゃの状態は何処も同じであった。病院の前庭は犠牲者の海で、そこら一帯に座り込んでおられた。入り口の防火用水槽は怪我人が傷を洗うので真っ赤になっていた。病院には戦地から後送された傷病兵がたくさんおられたが、彼等はもう一度傷付いた訳であって、これまた到る所に横たわっておられたように記憶する。病院入り口のところで一二の医師や看護婦さんが長蛇の列になった負傷者を手当てしておられたが全くの焼け石に水だし、第一満足な薬品や医療用具も有ったとは思えない状態であった。鉄帽を被った医師がこめかみの所から出血しておられたのを思い出す。「此処じゃどうにもならん。」と話し合っ、もう一度学校に引き返す事にした。

(五) 船舶部隊の救援

学校近くまで帰ってきた時、御幸橋のたもとの所に、宇品にあった陸軍船舶部隊の救援トラックが着いたところだった。恐らくこれは爆撃後に出動してくれた最初の便だったかも知れない。Y君を乗せてやって「頑張れや。」と言った。彼は宇品から似島に送られて治療を受け、元気になったと聞いた。この事は確か後日、呉駅で偶然彼に出会って聞いたと思うが、。ともあれ、彼は幸運で良かったのである。あの時、トラックはすぐに目もあてられぬ怪我人で一杯になったから、あの日終日兵隊さんは救援に従事して波止場と往復した事だろう。そして、その方々の中からも第二次被爆障害で犠牲になった人もあるかも知れないが、そんな事は当時知る由もない。

(六) 避難

私はそんな有様でも軽傷の方だから、学校でしばらくくすぶる建物にバケツ消火したり、片付けを手伝ったり、、、というような作業もしたが、とても手がつけられる状態ではないので、この現場を逃げ出したいと思った。後生大事に持ち出した弁当をかき込んで、わずかな荷物を持ち御幸橋に向かった。あそこの交番の所で、中国新聞の松重記者が撮影されて有名になった写真があつて、其処には座り込んだり、立ったままの学徒が多く写っている。あの光景はよく記憶にあるというのも、私自身があそこの水道で水を飲んだと記憶するからである。今ではもう交番所は残っていない。あそこだったか何処だったか、お巡りさんに罹災証明書を書いて頂いた。頭に包帯を巻いた巡査が戸外の机で証明を書いておられる写真もあるが、もしかするとお世話になった方かも知れない。

(七) 広島が死による

御幸橋を歩いて渡った。御影石の頑丈な欄干が、海側の方はきれいに行列したままで川に落ちて底に並んでいる。おやと思って足元の北側の欄干を見ると、これまた行儀よく一列になって歩道の上に倒れている。余程の馬鹿でない限り、強烈な爆風が川上の一方から襲ったのだという事はすぐ分かる。

よく晴れた、暑い八月のこの日、川上を見やると兩岸の町々が野焼きの火のように、巨大な煙の雲を巻き上げながらバリバリと燃えている。あの業火の下では、幾万人もの人々が焼かれ、逃げ惑っていた阿鼻叫喚の地獄だった訳だが、その時の私はそんな事は頭に浮かばなかった。思慮も浅い若者の事で、お恥ずかしい限りだが、自分が生まれて育ってきた、、、「広島が死による。ひどい事をしやがって、、、」位の感傷は覚えた。そして次に「畜生、一体何を落としやがった？ たった一発で？ でも一瞬のうちに何万発も爆弾を落とせる訳もないし、、、。これは話に聞いた事のある原子爆弾じゃろうか？」と考えたのであった。嘘ではない。「少年倶楽部」か、「子供の科学」だったかは覚えていないが、以前にそんな記事を読んだことがあったのである。「マッチ箱くらいの量の小さい爆弾で、戦艦を沈められる。」と書いてあって、それは原子爆弾というものだと書いてあったのである。そんな事を自慢しても仕方ないが、私が気付いたのは事実である。

でも、「フーン、アメリカもやりやがるのう。」くらいであって、「これはいけん、こんな物を持ち出されたら負けるわい。」とは思わなかった。近頃になって物知り顔に「あの時私は、これはいけん。日本は負けると思いました。」等という輩もいるし、今時の人なら「バカじゃなからうか。そこまで考えつかなかったのか。」とおっしゃるかも知れないが、その時の私達はそんな事くらいで戦争が終わりになるなどとは全く考えなかった。もっとも私はなんと言っても軽傷であったから、もっとひどい目にあっていたら、それどころではなかったろう、とも思う。まだまだ深くは考えられない思慮浅い、若者だったのである。

専売局（今のＪＴ）の方からも電車道に煙が舞っていたように記憶する。皆実町交差点から被服廠正門へ向かって東へ、あそこから北東へと瓦礫の間を抜けて歩く。これらの町々の家屋は同じように倒壊、半壊それこそ足の踏み場もない。倒れた家屋の木材や板、瓦、壁土、散乱した家財道具等で、先ず台風か地震のあとと思えばいい。ここら辺りは比治山の陰になって火災も免れて幸いだったのだが、勿論そんな事は後になって思いついただけの事である。その時はひたすら安全な所、自分の家に帰る算段ばかりであった。不思議にこれらの町々での人々の様子は記憶に無いのだが、ただ裏通りの瓦礫の上に赤ん坊が上を向いてコロンと死んでいる遺体があり、しかも埃まみれのままに放置されていたのを記憶する。さすがに可哀想だと思ったが、どうして親も大人達もそのままにしていたのだろうか、未だに分からない。あの辺りでは火傷の死亡も無かったはずだから、大方下敷きになって亡くなられたのであろうか、、、。

大正橋のたもとに派出所があったが、その掲示板に多分中国軍管区司令部のだろう、布告の張り紙がしてあった。

「本日広島は卑怯な米軍機の爆撃によって被害を受けたが、広島市民はこれに屈することなく直ちに復興に力を致し、鬼畜米英撃滅、必勝を誓って粉骨砕身の努力をせよ」とまあ、言うような趣旨であったと思う。その時は、私は誠にその通りであると素直に感じ、「こんなものを落とされたらもう駄目だ。戦争にならん。もう戦争も終わりじゃ。」とは決して思わなかった。まだまだ苦しい戦争は続くし、何れ沖縄のように米軍上陸があつて、我々は竹槍突撃で玉砕になるんだろう位に思っていた。あんな爆弾を落とされるようになったら勝利が難しいのは分かったが、さりとて降服等は全く考えもしなかったのが本音だったろう。

西蟹屋町の工員寮にたどり着いた。ここも状況は同じで、畳が飛んでいって、床板も天井もめくれている。押入れの持ち物も手につけられない有様であった。小さいスーツケース一つに学用品等と少しばかりの衣類を詰めて、荒神小学校あたりの旧二号線、大洲街道に出た。広島駅方面は盛んに燃えていたように思う。ここら辺りでも幸いに水道が健在だったので水を飲んだのを記憶する。少し歩くと大洲派出所があつて、あそこで避難民用の緊急食料で乾パンを一袋貰って食べたが実に美味かった。例の二センチ×三センチくらいの塩味の食品で、今だったら何とも思わないだろうが、あの時は本当に有難かった。

この街道でも避難民の行列が又ずっと海田市の駅に着くまで続いていたのだったが、全身包帯の人、大八車に載せてもらっている人達はマシな方であった。ちぎれた僅かな衣類を残して煤けて、全身火傷で両手を前方に突き出してそろそろ歩いて行く沢山の人達が切れ目なく続いていたのであった。

海田市の駅に着いたのは午後も遅くなって夕方近くであった。それでも山陽線上りの列車が、傷ついて広島から逃れる人々を乗せて五時近くに出発した。広島駅や向洋駅は壊滅していたので、あれは被爆当日最初の避難列車だったのだという事も聞いたが、どうであったか。汽車は少しも混み合っていなかったが、思えばあの時間にあそこまでたどり着く事が出来た人々が少なかったのかなと思う。

八本松駅で下車し、東広島の西志和村の自宅にたどり着いたのは十一時を回っていたと思う。きつと息子は死んだと思っていた母の喜びはご想像に任せる。母は水田で田の草取りをしていたそうで、ピカッと光線を感じて背伸びをしてみたら広島方向の山の間から例のきのこ雲が上がってゆくのを見たそうである。昼ころから怪我して、避難して来る人々がぼつぼつあつて広島壊滅のうわさを聞いた由で、私の事も半ば諦めていたのである。

(八) 後 遺 症

この後、数日間、下痢と発熱で床についたが、広島に残した荷物も気になったり、親戚の安否を尋ねる事もあったりで確か一度市内に入った。 駅に立ったとき、己斐駅や似島あたりまで見通せる焼け野原になっていたのてたまげた。

この後も寝込んで、八月十五日の終戦の詔勅は寝床で聞いたように思う。 悔しいと思ったり、もう灯火管制が無いのだと思ってホッとした。

若い元気でか、早々と被爆地を離脱したのが幸いだったか、水をかぶ飲みしたのが解毒作用を果たしたのか？ 私は程なく元気になってその後の年月を生き延びさせて頂いている。 有難い事である。 いくらかの成人病は抱えているし、白血球数がいつも少ないのが気になるが、どんな影響が残ったものかは不明である。 被爆者医療については国の手厚い配慮をして頂いているのであるから、あの日虫けらのように焼かれて犠牲になった方々の事を思えば、本当に勿体無いような余生なのである。

所 感

半世紀以上昔、未熟で深い考えもない若者だった日の体験。 茫洋とした忘却の淵に沈んで行った事も多い。 しかしあの時は、真剣に死の恐怖に震えた瞬間もあったし、この世の生き地獄を目にする 恐ろしい体験でもあった。 読者の方々にどれくらいお伝え出来たかと思う次第である。

あれは二度と地球上で使われてはならない残虐な兵器である事は誰しも思う事であるし、出来るだけあの日の惨状を多くの人々に伝えて、核兵器廃絶の世界世論を作るようにしたい。 それが犠牲者の願いでもあるから、私は生存被爆者の一人として、それに沿った努力を少しでもしないとイケない。 そのように信じている。

最近、縁あって広島に来られる外国人の方々にも被爆体験をお伝えできる機会を時々与えられている。 一様によく理解して同感してくれるし、中には涙を流して聞いてくれる方もあり、本当にこんなものは葬ってしまわないとイケないと言ってくれる。 一人でも多くの人にあの日の惨状と原爆の怖さを知ってもらって、又これを聞いた人が次々と原爆反対の声の輪を拓けるようにしたらいいと思う。

核兵器保有国も増加しているし、この爆弾の使用される恐れもますます増大している今日、どうすれば何処かの国の無謀なリーダーに軽率な引き金をひかないようにさせる事が出来るのか、切齒扼腕の思いだが、我々広島市民は人類の良識を信じて、地道な毎日の努力を続けるしか他に選択の余地はないのではあるまいか。